

「ワカモノによる地方創生」議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和2年11月29日(日)13:00～15:15

2. 場所：KAB熊本朝日放送 本社スタジオ

3. 登壇者：

内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局次長 新井孝雄

株式会社氷川のぎろっちょ 代表取締役社長 兼 農業部長 竹山実李

地域づくり部長 兼 広報部長 堀川桃子

鹿児島県立川内商工高等学校 加治屋優奈・小村好

熊本県立人吉高等学校 吉川優矢・蓑田悠翔・本田希帆・立作夏菜・溝口郷

新渡戸文化高等学校 統括好調補佐／一般社団法人 Think the Earth | SDGs for School
アドバイザー 山藤旅聞

(プログラム)

1. 開会挨拶及び施策説明

「今後の地方創生の方向性」について 新井 孝雄

2. 講演①「未来の光を、観せるために!! まちの課題を見つけ、会社を設立して奮闘中」
株式会社氷川のぎろっちょ 竹山実李・堀川桃子

2. 講演②「観光による薩摩川内市チャレンジ大作戦 地方創生を目指した4年間の取り組み」
鹿児島県立川内商工高等学校 加治屋優奈・小村好

2. 講演③「ボラ観～ボランティア×観光～」 吉川優矢・蓑田悠翔・本田希帆・立作夏菜・
熊本県立人吉高等学校 溝口郷

3. パネルディスカッション

ファシリテーター

山藤旅聞

パネリスト

株式会社氷川のぎろっちょ 竹山実李・堀川桃子

鹿児島県立川内商工高等学校 加治屋優奈・小村好

熊本県立人吉高等学校 吉川優矢・蓑田悠翔

4. 閉会挨拶

*敬称略・順不同

司会：

こんにちは、KAB 熊本朝日放送アナウンサーの田中杜旺です。

これより、ワカモノによる地方創生ライブシンポジウムを開催いたします。本日、司会進行を務めさせていただきます。宜しくお願い致します。

このライブシンポジウムは政府広報事業として開催されています。with コロナ時代に国と地域と皆さんがひとつのチームとなるため『未来に向けて、知る・変わる・守る』をキーワードとした政府広報事業「チームNEXTステップ」を展開。全国で各テーマごとに情報を交換し、知識を深めるためのシンポジウムやワークショップをオンラインで開催しています。

本日は熊本市西区にあります、熊本朝日放送のスタジオから鹿児島、東京を繋いで「ワカモノによる地方創生」というテーマでワカモノによる講座とパネルディスカッションを行い、これからの地方創生について考えてまいります。

それでは、本日ご出演いただく皆様をご紹介します。

まずはこのあとご講演いただきパネルディスカッションでもパネラーを務めていただく皆様のご紹介です。

ご講演いただきます順にご紹介いたします。

まずは、株式会社氷川のぎろっちょの皆さんです。では、自己紹介をお願いします。

堀川（氷川のぎろっちょ）：

こんにちは、株式会社氷川のぎろっちょです。私たちは氷川町の耕作放棄地問題を解決するために会社を設立しました。現在は、人材育成事業や兼業農家育成事業に向けた作物の栽培や販売を行っています。本日はよろしくお願いたします。

司会：

この「ぎろっちょ」というのは氷川では有名なんですか？

堀川（氷川のぎろっちょ）：

ほかの地域では「ヨシノボリ」と呼ばれていて、氷川町では「ぎろっちょ」と呼んでいます。

司会：

この特性からも行動につながる部分があるということですから、この後の講演も楽しみにしていただきたいと思います。

司会：

さて、鹿児島県の会場からリモートでの出演になります。

鹿児島県立川内商工高等学校の皆さんです。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

川内商業高等学校は、商業科・機械科・電気科・インテリア学科の4学科あり、昭和3年に創立されました。

小村（鹿児島県立川内商工高等学校）：

商業科は、資格取得と地域連携に取り組んでおり、今回は地域と連携した「映像制作」について発表します。

司会：

リモートでなかなか難しい部分もあるかと思いますが、ご講演を楽しみにしておきます。

ではスタジオに戻りまして、熊本県立人吉高校の皆さんです。自己紹介をお願いします。

吉川（熊本県立人吉高校）：

こんにちは。私たちボラ観は、様々な方面から高校生ならではの活動を通して人吉球磨の地域活性化を目的に活動している団体です。今日はよろしくお願いします。

司会：

よろしくお願いします。7月豪雨で甚大な被害を受けた人吉球磨地域にある人吉高校なんですけれども、そこからの復興に向けた部分というところでも今日の講演で発表していただきます。よろしくお願いします。

さて、続きまして東京の会場からご参加いただきます、本日のパネルディスカッションでファシリテーターを務めていただきます山藤旅聞さんです。山藤さん自己紹介をお願いします。

山藤：

はい。皆さんこんにちは。山藤旅聞と申します。新渡戸文化高等学校で統轄校長補佐、そして一般社団法人 Think the Earth のメンバーとして教員としての立場と学外の立場、両面性をもって学校と地域を繋いで、そして複数のプロジェクトを生み出しながら子どもたちと大人がともに未来を創る、そんな教育をデザインしている仕事をしています。今日はパネルディスカッションでファシリテーターを務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：

山藤さん、よろしくお願いいたします。

皆さんはこれからの未来の地方を支えていくために日々、様々な活動を進めていらっしゃると思います。本日はその様子や考えをこの場を通して発言していただきます。よろしくお願いいたします。

さて本日は YouTube ライブでの配信ということで全国はもちろん海外からも視聴されている方もいらっしゃるかと思います。まずはこちらメイン会場となっております熊本の魅力を紹介する VTR をご覧いただきます。どうぞご覧ください。

司会：

コロナ禍においてなかなか熊本に積極的にお越しくださいとはいえずらい状況ではありますが、今日は少しでも熊本の魅力を感じ取っていただければと思います。

さて、続きまして内閣官房まち・ひと・しごと創成本部事務局次長 新井孝雄より開会のご挨拶を申し上げますとともに、今後の地方創生の方向性についてご説明させていただきます。

1. 開会挨拶及び施策説明

新井：

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました内閣官房まち・ひと・しごと創成本部事務局次長の新井と申します。みなさまにおかれましては日頃より地方創成に関する施策の推進にご理解ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。本日は新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、オンラインにて開催させていただきますが最後までお付き合いいただきたく存じます。また、本日は日本の人口や人の移動に関してデータで確認しつつ地方創生

に関する目標や施策の基本的な方向性をまとめた「第2期まち・ひと・しごと創成総合戦略」についてご説明するとともに、本日のシンポジウムのテーマであります「ワカモノによる地方創生」に関連して若い方々と地方創生の考え方や、学生など若い方々に向けた施策の紹介などをいたしたく存じます。

I. 地方創生の現状

それでは参考資料の2ページをご覧くださいたく存じます。地方創生の必要性ということでございますが、日本が迎えている人口減少社会の基本的なイメージをもつ意味で図表を見ていただきたく存じます。この図は日本の人口の推移を長い時間軸で捉えたものでございまして、日本の人口はほぼ横ばいで推移しており、ある種の人口定常社会であったと捉えることができます。一方、明治以降は人口が急激に増加しております。最初の立ち上がりは明治維新後の富国強兵、その次は第二次大戦以降の高度成長の時期に該当いたします。しかしながら、20世紀から21世紀への世紀の転換にかかると状況は一変し、2011年以降は完全に人口減少社会に突入をしております。人口減少社会が経済社会に与える影響といたしましては、「社会保障などの持続可能性が困難になること」「中山間地域等の活力の低下」などが指摘されております。3ページをご覧くださいたく存じます。これ出生数等の動向でございますが、出生数は第二次ベビーブームを記録いたしました1970年代前半から一貫して減少しております。また、出生率は2005年に最低の1.26を記録したのち、その後若干回復いたしました。がまた低下し2019年には1.36になっております。第二次ベビーブーム世代の最後にあたります1974年生まれの方も2019年時点ではすでに45歳に達しており、それより下の世代では女性の数が急速に減少しております。今後出生率が多少上昇しましても、出生数が減少し続け、人口減少は止まらないということが分かると思います。続きまして4ページをご覧ください。こちらは「人口減少・少子高齢化の現状」でございます。総人口のピークの2008年から総人口は減少局面に入り年少人口・生産年齢人口ともに減少しております。一方、青色で示しました65歳以上の老年人口は一貫して増加しており、高齢化率は3割に迫る勢いでございます。続きまして5ページをご覧くださいたく存じます。この図は東京圏への転出入の現状を示したものでございまして、東京圏への転入超過は増加傾向にあり、2019年は14.6万人でございます。転入超過の大半を占めるのは青色で示しました10代後半、緑色で示しました20代前半、黄色で示しました20代後半の若年層でございます。一方、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で7月から3か月連続で東京圏への転出が超過をしております。東京一極集中に変化が起きておりますこの動向を注視する必要があると考えております。

II. 政策の方向

続きまして、政策の方向性についてご説明させていただきます。7ページをご覧ください。

7ページでは昨年12月に策定されました第2期「まち・ひと・しごと創成総合戦略」の政策体系を示しております。この政策体系では4つの基本目標、1つ目は稼ぐ地域を作るとともに、安心して働けるようにする。2つ目は、地方とのつながりを築き、地方への新しい人の流れをつくる。3つ目は、結婚・出産・子育ての希望をかなえる。4つ目は、人が集う、安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくるという4つの基本目標に対しまして、横断的な目標として、多様な人材の活躍を推進する、新しい時代の流れを力にするといった横串の政策を続けております。続きまして8ページをご覧ください。こちらは、本年7月に閣議決定した「基本方針2020」でございます。感染症の克服と経済活性化の両立の視点を取り入れつつ、新たな日常に対応した地域経済の構築、東京圏への一極集中の是正、人口減少・少子高齢化というマクロの課題に対する取り組みを強化するという考え方のもと、これらに資する予算を重点的に要求をいたしております。続きまして9ページをご覧ください。地方創生テレワークの推進ということでございます。新型コロナウイルス感染症の拡大により、全国で約3割以上の方がテレワークを経験し、地方移住への関心の高まりがみられるなど、国民の意識・行動も変容しつつあります。このため、本年7月に閣議決定した基本方針2020において、地方への仕事の移転、地方移住に向けた機運醸成などに向け、東京企業のサテライトオフィス誘致に戦略的に取り組む地域を支援してまいります。具体的にはサテライトオフィスの整備と地方への新たな人の流れを創出する地方公共団体の取り組みを支援する「地方創生テレワーク交付金」の創設、国や企業・地方公共団体との間の情報提供体制の強化や企業の取り組みを見える化等に向けた調査広報事業、東京から地方に移住して就業する方への支援金を支給する地方創生移住支援事業について制度の対象の拡充を要求しております。続きまして10ページをご覧ください。「地方大学の産学連携の強化と体制の充実」ということでございます。地方創生の実現に向けては若者の地方への流れを作り出していくことが大変重要でございます。「基本方針2020」において魅力的な地方大学等の実現のための改革パッケージを年内に策定することとされております。続きまして11ページをご覧ください。先端的なサービス構築に向けた実証事業、データ連携基盤の整備等、複数分野にわたります都市のDX化を大胆な規制改革とセットで実現する構想の推進でございます。続きまして12ページをご覧ください。新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金でございます。この交付金につきましては、地域の実情に応じたきめ細やかな取り組みを推進できるよう自由度の高い財源を手当てする観点から令和2年度第1次、第2次補正予算合わせて3兆円を計上しております。感染拡大の防止及び、感染拡大の影響を受けている地域経済や住民生活の支援を通じた地方創生に資する事業を交付対象としております。具体的には図の4つの事業がこれに該当します。

Ⅲ. ワカモノと地方創生

続きまして、「若者と地方創生の取り組み」についてご紹介させていただきます。それでは14ページをご覧ください。これは本年3月に公表した実践的な活動等を通じた地方創生の理解度等調査の調査結果を抜粋したものでございます。高校生の進学先の選定プロセスには全国共通のパターンがあり、特に重要な局面は高校2年生の夏と高校3年生の秋で、その前後に大きな意識の変化があるということがわかりました。続きまして15ページをご覧ください。「地元定着・将来的なUターン促進に向けての示唆」ということで、現状キャリア設計という観点から大学や企業の選択という進路の選択が行われておりますが、この視点に加えまして将来設計や生活設計の視点を加えていただきたく存じます。皆様方が今後の進路の選択をサポートする上で、若いころに地元や自分の将来の生き方について考える機会を持っていただきたく存じます。続きまして16ページから18ページでございますが、今回地元について考えている同世代の仲間と議論する機会を提供するというので、氷川のぎろっちょ、鹿児島県立川内商工高等学校、熊本県立人吉高等学校の3つの事例を紹介したいと思います。ひとつめの氷川のぎろっちょにつきましては、SDGs まちづくりアイデアコンテストで最優秀賞を受賞した事例でございます。2つめの鹿児島県立川内商工高等学校でございますが、高校生たちが地域経済システム「RESAS」を使用して、隣の市の霧島市と薩摩川内市を比較し、その分析結果から広告プロジェクトを進めるというものでございます。3つめは、高校生たちがボランティアという活動で地元貢献している事例でございます。続きまして19ページをご覧ください。先ほど、「地元定着・将来的なUターン促進に向けての示唆」ということで若いころに地元について考える機会の提供や自分の将来の生き方について考える機会の提供と言うことが大事だということを申し上げましたが、その際地方居住や地方で働くことについて自分事化して進めていくということがポイントであるというふうに指摘をさせていただいたところでございます。

今年1月に東京圏在住者を対象にした調査で20代30代の約4割が地方暮らしに関心を有しているものの実際に検討段階に立っている者は2割に満たないことが判明いたしました。このためこれらの移住潜在層をメインターゲットとして移住に向けた行動を起こしてもらうためのサイト「いいかも地方暮らし」を10月立ち上げたところでございます。最後に高校生の皆さんを始めとする本日のシンポジウムに参加している方々に2点、お願いをいたしたいと存じます。日本の人口減少や東京一極集中の問題をぜひ皆様方の主体的に取り組むべき課題として捉えていただきたいということです。2点目は同世代の皆さんで地元や自分の将来の生き方について考え議論する場を持っていただきたいということでございます。以上2点、お願いして私の講演を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

司会：

人口が減少する中「地方創生」を成し遂げると言うのは本当に難しいテーマなんですけれども、だからこそ若者の皆さんの新たな観点・パワーが必要になってくるわけです。

さて、それでは早速講演に入りたいと思います。熊本と鹿児島で活躍されている若者の皆様からそれぞれの活動についてご講演いただきたいと思います。最初に講演していただくのは株式会社氷川のぎろっちょの皆さんです。本日は代表の竹山実李さん、地域づくり広報担当の堀川桃子さんにご講演いただきます。それではお願いします。

2. 講演①「未来の光を、観せるために!! まちの課題を見つけ、会社を設立して奮闘中」

堀川（氷川のぎろっちょ）：

みなさま、こんにちは。熊本県氷川町から来ました、株式会社氷川のぎろっちょの堀川桃子と申します。私たちは、熊日宮原販売センターの子ども記者クラブと、まちの課題解決・探究コースにも所属しています。弊社は、女子中学生5人で2年前に設立し、現在、私は広報部長と、地域づくり部長を兼任しています。

竹山（氷川のぎろっちょ）：

同じく、竹山実李です。代表取締役社長と、農業部長を兼任しております。

堀川（氷川のぎろっちょ）：

氷川町は、熊本市から南へ 30 km の位置にあり、旧竜北町と旧宮原町が合併した町です。人口は約 12,000 人で、イチゴやトマトの栽培など、農業が盛んな町です。それでは、これから私たちの活動を、スライドを使って説明させていただきます。

熊日宮原販売センターの子ども記者クラブは、子ども達の人材育成を目的に、9年前に発足しました。現在、小学3年生から高校3年生まで66人が所属しています。マスコットキャラクターである「ぎろっちょ」とは、ハゼ科のヨシノボリのことで、清流氷川のシンボルです。少し飛び出た目とお腹に吸盤があるのが特徴で、地域をしっかりと見て、きつなくても周りの環境に流されずに、頑張ろう！という、思いが込められています。

子ども記者クラブに入ると、名刺や記者ノートなどが配られ、活動する時には、腕章をつけます。おもな活動は、学習系、食育系、交流系の3つに分かれますが、特に人気があるのは、交流している全国の町の特産品を販売する「わらしべ市」です。また、全国から訪れる

大学生や、県外研修で訪問する大学の先生方と交流するのも魅力的です。そして、この研修に参加すると、大学のことや世の中の動きなど多くのことを学び、地域に対する関心が、更に深まります。

まちの課題解決・探究コースは、地域を見て課題を発見する力や解決する力のほかに、地域や人に元気や勇気を提供することを目的に、4年前に発足しました。毎週土曜日の夜に定例学習会があり、合宿や保護者報告会なども行われます。私たち1期生は、耕作放棄地の解消がテーマですが、3期生は気持ちの良い道路環境作り、4期生は自慢できる水環境作りに取り組んでいます。定例学習会では、15分間のおやつタイムがあり、地域や学年を超えてお菓子を食べながら話すのが、とっても楽しいんです。小学生から高校生までみんな仲良しで、活動に対してアドアイスをしたり、サポートをしたりしています。

私たち1期生は、2016年3月に活動を開始し、まち歩きを2回行いました。いくつか見つけた課題の中から、大学生と議論し、町長の目線で考えて、テーマを耕作放棄地に決めました。その後、氷川町役場の方を招いた学習会や、農産物直売所と農作物の調査などを行い、2月末に、お世話になった方々や保護者を招き、活動報告会を行いました。

耕作放棄地の解消は簡単に出来るものではなく、長期的な視点で段階的に解決するために、レベル1から5を考えました。そして、レベル1と2までを、5年以内を実現することを目指しました。

耕作放棄地の解消を目指す組織を考えた時、任意の組織やNPOではなく、資金が集めやすく、私たちの本気度を示すために、株式会社を設立することに決定しました。会社の事業は大きく分けると3つあり、1つめは「支援・応援事業」で、耕作放棄地の草刈りと、兼業農家の育成を目指します。2つめは「直接的な事業」で、農作物の栽培と販売、オリジナル商品の開発と販売です。3つめは「人財育成事業」で、学習プログラムの開発により、子ども達を対象とした人財育成塾の開催や、教育機関との連携を目指します。そして、会社設立の資金や機械の購入には多くのお金が必要となりますので、クラウドファンディングにより資金を集めることにしました。

次に、コースの2年目以降の活動について、ご紹介いたします。2017年度は、会社設立に向けて、定款の検討やクラウドファンディングの準備。パトロンへのお礼の品とする、トートバッグと手ぬぐいの商品開発を行いました。クラウドファンディングでは、全国から160万円もの支援をいただき、2018年2月に会社を設立しました。2018年度は、集めた資金で自走式草刈り機を購入し、パッションフルーツや黒豆などの試験栽培のほか、設立1周年記念のイベントとして、「ぎろっちょ変顔コンテスト」を開催しました。また、会社設立1周年にあたり、私たちが交流している大学の先生やパトロンの方々から、ぎろっちょのカマボコ

をプレゼントしていただきました。

2019 年度から、本格的な活動がスタートしました。国道 3 号沿いの耕作放棄地を 6 反借りて、丹波の黒豆やパッションフルーツなどを栽培し、東海大学農学部と連携し、エリアンサスの栽培も始めました。また、組織の見直しを行い、農業部やひとづくり部など 5 つの部を作り、3 期生から副社長を選任しました。さらに、2 期生から 4 期生までの全員が地域づくり部に所属し、3 期生は全員が地域づくり部以外にも所属してもらい、連携を深めることにしました。

さて、2019 年度は、私たちにとって忘れられない出来事がありました。中高生を対象とした「SDGs まちづくりアイデアコンテスト」において、私たちが考えた「新・ムーンライト伝説～月夜の農業は、ワクワク感がたまらないよ♪～」が、最優秀賞を受賞したのです。この事業は、すでに今年度から取り組んでおりますので、その概要についてご紹介いたします。

農業の現状として、農家の減少や高齢化により、耕作放棄地が年々増加しています。一方で、私たち子どもは、昼間は部活などで忙しいですが、夜はワクワクしますし、月や星を見るのが大好き！そして、大人はストレスを発散したい！そこで、満月を含む 1 週間の涼しい夜に、農作業をやろう！というものです。しかし、どのように運営するのか、まちづくりの視点から考える必要もあります。そもそも、日常的に使われている「まちづくり」の定義は、なんでしょうか？

ご覧の漢字 6 文字は、台湾の大学の先生がまちづくりを表したものです。私たちのパトロンの 1 人である、早稲田大学の後藤春彦先生の研究室を 2 年前にお邪魔して、大変よくしていただきました。先生が本に書かれていることを、私たちなりに要約してみると、いかに多くのものを結びつけられるか？です。多くの課題を 1 本の串に刺し、事業として成り立たせ、相乗効果を生み出します。

竹山（氷川のぎろっちょ）：

新・ムーンライト伝説の事業に伴い、5 つの課題と事業のポイントを説明いたします。1 つめは、メインの課題である耕作放棄地の有効活用です。また、国道沿いの耕作放棄地で作業することで、情報発信にも繋がります。2 つめは、私たちの会社の後継者の育成です。町内の小中学生たちと活動し、子ども記者クラブや課題解決コース入会のきっかけにつながります。また、私たちだけでは事業を行うことは難しいので、いかに大人の協力を得ることが出来るかがポイントとなります。3 つめは、婚活です。日本全国で少子化が問題視されていますが、氷川町も例外ではありません。そこで、独身の男女を集め、満月の夜というロマンチックな空間を新たな出会いの場として提供することで、もう一つの町の課題を解決してしま

おうという目的があります。4つめは、私たちの会社の大人のサポーターを増やすことです。私たちはまだ学生なので、平日の昼間は作業が難しく、農業に関する知識や経験もまだまだ乏しいです。そのため、私たちだけでは難しい仕事をサポートしていただくサポーターの募集も合わせて行います。そして最後の5つめは、本年度から実施される大学入試改革対策です。新しい大学入試では、高校時代の社会貢献活動が可否に影響してきます。この活動を通じて、大学入試において問われる力とともに、これからの若者に必要とされる、社会人基礎力を付けることができます。

事業の成功のカギを握るのが、チーム編成です。たぬきチームとうさぎチームは小中学生とその保護者で構成されるチームです。小学生たちは根気が続くか少し心配ですが、どうしてもダメな場合は私たちが月に代わってお置きします。オオカミ男チームとかぐや姫チームは、独身の男女で構成されます。月の光に導かれ何度も巡り合えることがポイントです。農業経験者には正義の味方チームに入ってください、私たちのサポートをお願いします。そして、正義の味方の方々と良好な関係を築くために、私たちの女子力を最大限に生かします。

今年の1月から月夜の農業クラブについて、具体的な話し合いをスタートし、3月28日に説明会を行いました。メンバーは、一般会員が26名、サポーターが7名です。農作業は4月の満月からスタートし、個人ではトウモロコシやトマト、キュウリなど様々な作物が栽培されました。また、共同作業の一環としてサツマイモやハツカダイコン、キャベツなども栽培しました。参加者からは「楽しかった」や「作物がしっかり育ってくれて嬉しかった」と嬉しい感想が多く寄せられました。一方、課題としては、雨が降ると数日作業ができなくなるため、夜だけでなく、休日の昼間などにも作業を行うことが必要だと思っています。

クラブ設立の時から計画していたミニ収穫祭を、11月1日に行いました。後輩や正義の味方の方々と一緒に、サツマイモやミカン、長野県小布施町のリンゴや栗菓子などを販売しました。熊本市ほか、町外からも多くのお客様にいただきました。また、保護者を含め、6人の大人の参加があり、楽しく交流することができました。

さて、世の中には「まちづくりの化け物」が多く存在すると言われています。その化け物とは、少子化や高齢化などの社会的な問題のことです。まちづくりの課題解決を、桃太郎の鬼退治に例えてみます。桃太郎は、先導する人や計画。犬・猿・雉は、まちづくりにおいて得意分野を持つ人たちです。そしてきびだんごは、課題解決に取り組む、あるいは継続的に取り組むために必要な「動機」や「対価」ということになります。しかし、人口減少社会においては、得意分野を持つスペシャリストだけではなく、一人で何役もこなせるジェネラリストがどれだけいるか？が、ポイントとなるのではないのでしょうか？

そして、ジェネラリストになるには、相当な社会的経験が必要ですから、そのためにも子

ども時代の経験や能力開発が不可欠だと思っています。

人財育成塾は、これまでの私たちの経験を踏まえ、将来のジェネラリストとなってほしい後輩たちの育成を目的とした、一泊二日のプログラムです。プログラムの最後には保護者への報告会を行い、どんなことをしたのか、活動を経てどう思ったのかななどを発表します。ちなみに、参加費は9,600円ですが、子ども記者クラブに入会すると半額の4,800円となりますので、お得です。

第3回目の人財育成塾では「小さい秋をみつけよう」をテーマに、里山散策をしながら秋を感じる植物や木の実を集めました。集めたものを色紙に貼り、マスコットの「ぎろっちょ」をデザインしてもらいました。参加者は、「木の実が固定できない!」「もっとたくさん拾ってくれば良かった!」と、四苦八苦しながらか作っていました。完成した後は、色紙を交換して俳句を一句書いてもらい、お土産となります。参加者からは、「楽しかった」「また参加したい」と、毎回、嬉しい感想が多く寄せられています。また、保護者からも、「貴重な経験をさせていただき、ありがたい」など、感謝の言葉もいただいています。

今年の8月、「宮原好きネット」を中心に、「若者の人材育成と関係人口を考える学会」が設立され、弊社も入会しました。その理由は、私たちの活動が継続・発展するためには、人との繋がりが必要不可欠だと思うからです。また、人との繋がりを楽しくするために、先月から「関係人口通貨 GiRo」をスタートさせました。この通貨は、人財育成の第2弾として、先週から始めた「探求 to 表現力コース」の講師謝礼、農作業やイベント等への参加謝礼として支払います。GiRo マネーは、宮原好きネットでも運用され、たまったマネーは、弊社や小布施屋様の農産物と交換することができます。

弊社の活動は3年目を迎え、学生ゆえに、特に農業部門の課題が多いと言えます。しかし、後輩たちと楽しく力を合わせて、私たちの町だけでなく、日本の未来の光が観えるよう、今後さらに頑張っていきたいと思っています。

本日は、このような発表の機会をいただきまして、誠にありがとうございました。

司会：

ありがとうございます。地方創生というテーマだと一見堅いイメージがあるんですけど、男女の出会いの場の創出だったり、ぎろっちょ変顔コンテストだったり、工夫を凝らしながら関心を集めているというふうに感じます。耕作放棄地は農業の担い手不足で社会問題化していますけれども、首都圏に目を移すと農業をやりたいけど農地が無いという方もたくさんいらっしゃるかと思います。そういった所とのマッチング、こういった所にも繋がっていく取り組みだと思っています。氷川のぎろっちょのお2人、ありがとうございました。

さて、続きまして鹿児島県立川内商工高等学校の皆さんです。本日は代表で加治屋優奈さん、小村好さんのお2人にご講演いただきます。それではお願いします。

2. 講演②「観光による薩摩川内市チャレンジ大作戦 地方創生を目指した4年間の取り組み」

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

鹿児島県立川内商工高等学校です。よろしくお願いします。

「観光による薩摩川内市チャレンジ大作戦 地方創生を目指した4年間の取り組み」をお伝えします。まず鹿児島県薩摩川内市について紹介します。薩摩川内市は、鹿児島市から北西約40キロの地点にあります。一級河川である川内川が流れ、川内大花火や川内大綱引きといった伝統行事が行われます。特に川内大綱引きは、この行事を題材とした映画「大綱引きの恋」が現在、鹿児島県で先行上映されています。また、8月には甕島列島を結ぶ1.5kmの橋が開通し、市全体が非常に盛り上がっています。

続いて鹿児島県立川内商工高等学校について紹介します。川内商工高等学校は、機械科・電気科・インテリア科・商業科の4学科が設置されています。1学年8クラスで、商業科は2クラス、3学年で6クラスとなっています。生徒数は819名、私達商業科は220名です。

川内商工高校ではコンソーシアム商工事業として、商工連携による地域協働活動を行っています。それぞれの学科が地元企業などと連携し活動することで、地域の発展に貢献しています。

それでは、川内商工高校商業科による、観光による薩摩川内市チャレンジ大作戦についてお伝えします。この活動は、商業科3年生課題研究「動画編集」選択者による、4年間の取り組みについてです。

薩摩川内市は、鹿児島県でも比較的大きな町です。しかし、「住みたい街ランキング」「魅力ランキング」では町の規模ほど上位に位置していません。

なぜ薩摩川内市は上位に入らないのか、鹿児島県で同じ規模と思われる霧島市と比較分析し、市の実態について調べました。

分析は、地域経済分析システム「RESAS」を利用しました。「RESAS」とは、内閣府が運営する、地域経済に関する様々なビッグデータを、地図やグラフで分かりやすく見える化したシステムです。今年度は、新型コロナウイルスによる影響を調べることができる、「V-RESAS」も提供されています。それでは分析結果です。

まず人口ピラミッドです。人口は霧島市が多いです。次に企業数です。企業数も霧島市が多いです。付加価値額も霧島市が優良です。続いて、黒字赤字企業比率です。こちらは薩摩

川内市が優良です。主要財政指標比較レーダーチャートでも、薩摩川内市が優良となっています。

「RESAS」を使って調べた結果、経済規模は霧島市が大きいです。経済状況は薩摩川内市が良好ということが分かりました。つまり、経済状況は同程度であるといえると思います。

しかし、違う角度から調べてみると課題が見えてきました。続いて、観光分野に限定して比較することとしました。まず延べ宿泊者数です。霧島市が 25 倍も多い結果となっています。

さらに検索回数も霧島市が 26 倍の結果となっています。このようにビッグデータを使って調べた結果、観光分野に限定すると非常に大きな差となっていることが分かりました。

なぜ薩摩川内市は観光分野が弱いのか。薩摩川内市には魅力的な観光素材が存在しないのではと推測しました。しかし、調べると薩摩川内市にはたくさんの観光素材が存在することが分かりました。

では、原因はどこにあるのか。私達は「認知度の低さ」が原因だと考えました。そして、産学官が連携した PR 活動「観光による薩摩川内市チャレンジ大作戦」を実施することとしました。取り組みは 3 つです。

チャレンジ① 映像制作で PR

チャレンジ② ポスター制作で PR

チャレンジ③ SNS で PR

このチャレンジを実行することで、認知度向上を狙います。私達の活動の特徴は「産学官での連携」です。企業や団体に取材先になっていただき、川内商工高校が制作します。薩摩川内市には取材先の紹介や講師の派遣、取材先までの車の手配などをしてもらいます。連携することで互いの長所を活かし、より魅力的な活動となります。講師の先生は、合同会社アースボイスプロジェクト 代表社員 榎田りゅうじ先生です。先生から 1 年間指導を受け、写真・音楽・音声の 3 つを組み合わせた 2 分間の映像を作っていきます。歴史や思いを伝え、共感してもらえるような作品作りをしました。つづいて制作手順です。講義に始まり、取材先の選定、取材依頼、取材、制作の順に行っていました。

小村：

それでは昨年までの 3 年間で取材したテーマについてお知らせします。

テーマ① 川内駅近郊カフェ

川内駅から歩いていけるカフェを取材しました。

テーマ② 祭りや伝統芸能。

川内はんや祭りや、東郷人形浄瑠璃といった昔から伝わる祭りや芸能を取材しました。

テーマ③ 魅力的な施設

柳山アグリランドや川内宇宙館など、小さい子供から大人まで楽しめる施設を取材することとしました。

テーマ④ 歴史的建造物

大宮神社や可愛山陵といった、長い歴史を誇る薩摩川内市の貴重な建造物や遺跡を取材しました。

テーマ⑤ 雄大な自然

西方海水浴場や藺牟田池など、自然を取材しました。

テーマ⑥ 地域住民からの視点

市の健康推進への取組・子育て支援・I ターン者の目線といった、暮らしやすさ・生活のしやすさをテーマに取材しました。

テーマ⑦ 家業や故郷について

果物が有名な土地で果樹園を営んでいる祖父母を取材し、より身近な目線から取材しました。

このように、観光地から、生活する視点まで、様々なテーマで制作しました。

こちらが完成した映像です。

こちらが完成したポスターです。

それでは、ここで2つの作品をご覧ください。

作品名は「守りたいもの」。取材先は、大宮神社です。

続いての作品です。

作品名は「自然の街川内で」。取材先は「元地域おこし協力隊」青崎夫妻です。

広報活動も展開しました。発表会の開催やWebサイトからの映像配信、ポスター掲示など、様々な方法で認知度向上を図りました。

さらにコンテストにも参加し、2019 地方創生☆政策アイデアコンテストでは内閣府で開催された最終審査会に進出し、協賛企業賞をいただきました。これまでの効果はこのようになっています。

令和2年度における取り組み。これまで3年間、薩摩川内市に支援していただき「観光」をテーマに活動してきました。しかし今年、新型コロナウイルスが流行しました。一斉休校、クラスター、テレワークなど今まであまりなじみのない言葉も頻繁に聞かれ、人々の暮らし・価値観に大きな変化をもたらしました。そしてこのような変化した社会の中で「地域活性化＝観光」と言えるのかと疑問に感じるようになりました。そして今年度「コロナに負けるな！」地域資源プロデュース作戦として取り組みを実施することとしました。取り組みは次の通り

です。

テーマをこれまでの観光から、免疫・発酵・長寿といった健康に変えることとしました。さらに、これまで通り榎田先生から教えていただき、完成した映像は Web へのアップに加え、さらに商事会社といった企業を招き発表会を開催します。こうして薩摩川内市の魅力的な資源について知っていただき地域活性化につなげたいと考えました。

テーマはこのように決まりました。薩摩川内市を中心とした、地域の特産品を取り上げます。2月8日月曜日に川内商工高等学校で発表会を開催する予定です。

私たちの考える地方創生とは、地元愛を原動力に住民みんなで街を創り上げるものです。これまで様々なテーマを取り上げ、地域に存在する魅力ある資源を映像で訴え、広く薩摩川内市について知ってもらう活動を行ってきました。「商工コロシウム」の考えのもと、今後も地域活性化に向けて薩摩川内市を PR したいです。以上で発表を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。地域の魅力の再発掘と外からの視線を取り入れていらっしゃいました。地元にとっては当たり前のことでも、伝え方によっては全国、そして世界にとって魅力的なものに映る事かと思えます。またこのコロナ禍においては変化に敏感に気づいて対応することが大事になってくるかと思いますが、そこにも若い力が活かされていると感じます。川内商工高校の皆さん、ありがとうございました。

続きまして、熊本県立人吉高等学校の皆さんです。本日は、吉川優矢さん・蓑田悠翔さん、本田希帆さん、立作夏菜さん、溝口郷さんの5名にご講演いただきます。それではお願いします。

2. 講演③「ボラ観～ボランティア×観光～」

吉川（熊本県立人吉高等学校）：

今からボラ観の発表を始めます。宜しくお願いします。

まず私たちの地元について少し説明します。私たちは人吉・球磨からやってきました。人吉・球磨には広大な自然や歴史的な建造物が多くあり、人吉・球磨の一番の特産品といえばやはり焼酎だと言えるでしょう。そして人吉・球磨は熊本県の南部、この辺りに位置しています。そのような人吉・球磨では現在人口の減少が深刻な問題となっています。平成31年3月31日には5つあった高校のうちの1つである熊本県立多良木高校が廃校となってしまい

ました。

私たちはこのような状況の中で人吉・球磨を将来に残したいという思いから、ボラ観の基本理念である人吉球磨を地図から消したくない、が生まれました。次に、成り立ちについて説明します。なんとすべてはアメリカから始まったんです。どういうことかということ、人吉球磨では海外研修を行っています。その研修でアメリカを訪れた際、別の研修でアメリカを訪れていた神奈川県私立高校聖光学院さんと互いの地域の課題について話し合う機会がありました。その時に仲良くなり、そして帰国後もメールなどのやり取りがありました。そうした中で、ぜひともに活動する機会を設けたいということになり、第一回の人高×聖光交流会が開催されました。そして、その中の活動で生まれたのがボラ観です。このボラ観はボランティア×観光の略であり、人吉球磨の地域活性化を目的に活動している団体です。

これまでの活動を説明する前に誕生当初について説明します。誕生当初は人吉・球磨以外の人々に人吉・球磨について知ってもらいたいボラ観がボランティアと観光を掛け合わせた企画を作り、それに参加してもらうことで外部の人に人吉・球磨について、より知ってもらおうという活動をしていました。しかし、私たち二代目では「基本理念」を作り、人吉・球磨の人々に人吉・球磨をより知ってもらうことが大切だと考え、焦点を外部から内部へ移して活動をしてきました。

それではこれまでの活動について紹介します。まず、第一回ボラ観イベントです。第一回では栗農家さんのお手伝いをさせていただき、その後、温泉に入るというイベントを開きました。次に、第二回ボラ観イベントです。第二回ボラ観では景観向上のためのシャッターアートを作りました。夜の閑散とした雰囲気の中に昼間を思わせるシャッターアートが完成したことで、町の雰囲気が少し明るくなったように感じました。これから紹介するのは私たち二代目が主に取り組んできた活動です。第三回ボラ観イベントです。人吉・球磨には雄大な自然を全身で感じる事ができる球磨川下りというものがあります。そこで私たちは船の清掃ボランティアをさせていただきました。お客様のお見送りや、実際に体験させていただくこともできました。また、この日の午後には「ウンスンカルタ」を体験しました。ウンスンカルタとは心理戦やみんなとのコミュニケーションを通して楽しく遊ぶことができる、人吉の伝統文化です。この時のウンスンカルタがとても楽しく、また、参加者にも「またやりたい」や、「もっと多くの方にウンスンカルタについて詳しく知ってもらいたい」という思いから第四回ボラ観イベントでは学校でウンスンカルタの体験教室を開きました。生徒だけでなく、先生方も同じ卓を囲んで遊んでいる姿がとっても印象的でした。また、私たちボラ観では人高×聖光の交流会も開催しています。今までに私たちは第一回、第二回、そして第三回、そして今年の2月上旬には第四回人高×聖光の交流会を開催しました。まず1日目です。1

日目には郷土料理である「つぼん汁」をつくりました。本格的なものを作ることはできませんでしたが、とってもおいしかったです。そして2日目です。2日目には人吉市内を回るフィールドワークを行いました。この日の午後にはフィールドワークで集めた情報をもとに、観光案内ポスターを製作しました。そして3日目です。3日目には「竹灯籠の穴あけボランティア」をさせていただきました。実際に完成した作品がこちらです。この完成した作品は人吉市で開催された「人吉まちあかり」というイベントで展示させていただくこともできました。

蓑田（熊本県立人吉高等学校）：

次に、私たちが活動を通して学んだことを紹介します。まず、地域活性化をする手間に必要なことは「若い人が地元を知ること」であるということです。なぜなら、これからの地域は若者にかかっているからです。地域の農業などの産業・政治など若者への世代交代はどの地域でも常に行われています。しかし、地域が持つ問題はワカモノにもありました。このグラフは2019年11月にとった「ウンスンカルタを知っていますか？」というアンケートの結果です。聞いたことがある、全く知らないという人が4分の3を占めています。また、こちらのグラフは「ウンスンカルタに興味がありますか？」というアンケートの結果です。60%の人が興味が無いと答えています。このように若者の地域への興味が薄れ大変深刻な状態です。地元の文化を継承し、地域の未来を守るためにも若い人に地元を知ってもらうということが大切なのではないのでしょうか。

また、若者にはもう一つの効果があります。それは、若者が動くと、大人の方々にも刺激を与えることができるということです。若者のチカラは地域のイベント等の大きな活性化につながるだけでなく、大人を含め様々な方に刺激を間接的に与えることができるということがあります。私たちが活動していく中でも「君たちのような若者がこのような活動をしているのだから、私たち大人も頑張らなきゃね」という言葉を頂くときがありました。このように、若者のチカラは地域活性化において大きな役割を抱いています。そのために、まずは地域のことに興味を持ってもらうということが大切だと考えました。

次に私たちが学んだことは、自ら行動を起こすことで様々なつながりが広がるということです。例えば私たちボラ観という団体があり、イベントを企画していく上で様々な個人や団体にアプローチを掛けます。するとそこからの紹介でまた別の個人や団体にコネクションが広がり、たくさんの大人の方々と意見を交換し合い、自分たちの考えを深めることができました。

次にこれからの活動についてです。私たちボラ観の特徴として基本理念「人吉・球磨を地

図から消したくない」というのが抽象的ということがあります。これは一見すると、活動内容がまとまっておらず、マイナスに思えることかもしれません。しかし、逆に活動内容を1点に絞らないことで様々な方面から地域活性化に取り組むことができるという利点があります。この利点を生かし、これからは形にとらわれず、高校生ならではの活動をやっていきたい。私たちはそう考えていました。

本田（熊本県立人吉高等学校）：

しかし、人吉・球磨を地図から消したくないという活動理念をもって活動していこうとしていた矢先、長引くコロナ休校期間に次いで、人吉・球磨を水害が襲いました。ニュースや新聞で知っている方も多いと思いますが、今日改めて人吉・球磨豪雨災害について発表します。これから先のスライドには被害当時の写真がございます。ご視聴の際はご注意ください。まず被害状況についてです。これは災害直後の写真です。車体がすべて浸かってしまっているのが分かります。また、球磨村のある地域では平屋が全て浸かってしまうほどの水量でした。こちらは熊本県危機管理防災課が出している住宅被害の合計です。人吉市と球磨村で被害が大きかったことが分かります。人的被害についても特に被害が大きかった人吉市で20名、球磨村で25名の方が亡くなられています。避難所の利用者数は災害当時、市内12か所合計1,223人の方が避難されていましたが、10月30日付で市内7か所合計239人の方が今も避難されています。

では実際、避難所での生活がどのようなものであったのか、被災された方に実際にお話を伺うことができました。その方は被害が大きかった球磨村に住んでおられて、今回の水害ですべて浸かってしまいました。その方のお話によると7時30分ごろに浸水が始まり、9時50分には2メートル以上の水が押し寄せたそうです。そのため、低地にある指定の避難所ではなく高地の避難所に避難することを選択されました。しかしその避難所には壁や床が無く、二晩は土の上にブルーシートを敷いて寝るという生活が続きました。それから別の避難所に移動しましたが、それから5日前後は段ボールベッドも届かず床に寝る生活が続きました。避難所では掃除当番やリーダーが決定され朝早く起きて当番の仕事をこなしたあとは自分の家の片づけに向かい、疲れた体で夕飯を作って一畳ほどのダンボールベッドに倒れるように眠りにつく毎日が続いたようです。何しろ体制が整わない最初の時期が大変で、避難所には情報が回ってこず不安になったり、あとは明らかに病院に搬送した方が良いと思われる被災者の方が避難所に運ばれ、他の避難している方が看病をするという事態も起こりました。これらのことから災害直後に地域全体が物事の優先順位を共通理解し、連携を図ることが大事だと考えられます。また、支援物資の内容が偏ってしまうことも多かったため、本当に必要

なもの足りないという事態を防ぐための取り組みも必要だと感じました。

最後に現状についてです。11月2日付で人吉市で265戸、相良村で24戸、山江村で25戸、球磨村で269戸の仮設住宅が設置されています。また、これから完成予定の仮設住宅も多くあります。災害から約5か月がたち、状況は少しずつ良くなってきていますが、新たな人吉・球磨になるためにはまだまだチカラが必要です。私たち高校生を中心にワカモノのチカラを発揮してこれからも復興に向けて頑張っていきたいと思います。

立作（熊本県立人吉高等学校）：

次は、ボランティアの状況についてです。被災後すぐの学校休校期間やしばらく経ってからの土日などこの期間を利用して多くの高校生が被災地に出向き、片付けや清掃活動を行いました。まず私たちは被災2日目にはいつもボラ観の活動でお世話になっていた立山商店を訪れ、ボランティア活動を開始しました。そこでは高校生約13人で1週間活動を行いました。作業内容は「床下の泥出し」「ゴミ拾い」「床板洗い」「庭の泥出し」「家具・壁拭き」等です。約1週間参加する中で、立山商店にはそこに繋がりがある人が食べ物を持って訪れたりボランティアに参加したりなど、多くの人が集まっていることに気が付きました。そこで私は繋がり大切さを改めて実感することができました。また被災後1ヶ月半も経ってから、人吉高校主催の人吉旅館でのボランティア活動に参加しました。このボランティアに参加する数日前に立山商店を訪れ、そこではすでに営業を始めていたこともあって人吉旅館でのボランティアの活動内容を甘く見ていた自分がいました。実際、ボランティアに参加してみると床下にはいまだにかなりの土砂が溜まっており、その中にはガラスや有刺鉄線なども多く含まれていました。人吉旅館自体、川のすぐ隣にあり被害も大きく、元に戻すといっても簡単な事ではないということに気づかされました。人吉旅館の方は来年の8月には営業を開始するつもりだとおっしゃっていました。自分が想像していたより復興に時間がかかることに驚き、また、まだまだボランティアのチカラが必要であることを痛感しました。

溝口（熊本県立人吉高等学校）：

今回の水害により、人吉・球磨は大きな転換期を迎えています。それは水害により衰退し、地図から消えてしまうのか、水害を乗り越えて復興し以前より活気ある町になるのかというものです。復興の担い手となるのは近いうちに社会人となる私たち地元の高校生でしょう。その為にも今、私たちはボランティアに参加し、人吉・球磨の状況を目に焼き付け学校の勉強にも励み、復興に貢献できるよう成長することが必要だと私は考えています。今、高校生の行動が人吉・球磨の復興を担っているのです。これまで人吉・球磨を地図から消したくな

いという理念で活動してきましたが、これまでのボラ観の活動で学んだ2つのことを今回の水害で実感しました。1つめは「地域の未来は若者にかかっている」ということ。ボランティアの際、若者がいると活動に活気が出るという話が多く出ました。若者のエネルギーは大人の方々に刺激を与えます。若者が頑張ることで活動を活発にできるのです。若者のチカラが復興の大きな力になる事は間違いありません。2つめは「人と人とのつながりが大切」ということです。水害後、これまでの活動で交流を重ねてきた聖光学院さんが私たちに寄付をしてくださいました。また、聖光学院の文化祭「聖光祭」では人吉・球磨の伝統的な遊びであるウンスンカルタの体験会を行い、人吉・球磨の復興を応援してくださったのです。他にも多くの方々が支援物資を送るなどしてくださいました。これまでのボラ観の活動で築き上げてきた繋がりが目に見える形で顕れたのです。ボラ観の活動でつながった人と人が協力し、励まし合い、つながりが復興の大きなチカラとなっています。この若者のチカラ、人と人とのつながりはこれからの復興でさらに重要になってくるはずです。私たちはボラ観での学びを復興へ、人吉・球磨の未来へ活かしていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。大きな被害を受けながらも皆さん自ら動いて課題とそして未来につながる光を見つけていらっしゃいました。先日熊本県も復旧・復興プランを発表したんですけれども、大きな目標としていたのが持続可能な地域とするために若者が集う場所にするということでした。その為にはやはり若者の感性というのが必要不可欠になってくるかと思えます。皆さんの活動が必ずや波及することかと思えます。人吉高校の皆さんありがとうございました。

さて、本日は熊本のKAB熊本朝日放送のスタジオから、東京と鹿児島の会場をつないでライブ配信でお送りしています。テーマは若者による地方創生ということでここからはパネルディスカッションを進めてまいりたいと思います。

それではここで東京の会場からご参加いただきますファシリテーターの山藤旅聞さんをお呼びしましょう。山藤さん改めて挨拶と自己紹介をお願いします。

山藤：

改めまして新渡戸文化高等学校統括校長補佐及び一般社団法人 Think the Earth のメンバーでもある山藤旅聞と申します。今日はどうぞよろしくをお願いします。

私は学校の教員である立場と一般社団法人という学校外の立場を活用して学校と社会を接

続いて未来を作る、子供たちと大人たちが一緒に未来をつくるそんな教育をデザインしていきたい、そんな仕事をしています。今日の3つのチームのですねお話を伺ってまさにこういう活動が全国にどんどん広がるといいなと、そういうことをお手伝いできればという思いで仕事をしています。今日は3チームの皆さんほんと素晴らしいお話ありがとうございました。あっという間の時間でここまで来ました。ここからはですね、皆さんとパネルディスカッション通じて今この放送を見ている全国の高校生たちがですね、何かこれから一歩動き出すヒントになるようなそんな時間になればいいなと思っています。どうぞ皆さんいろいろ教えてくださいよろしくをお願いします。

司会：

山藤旅聞さんありがとうございます。それではここから山藤さんにバトンタッチをして進めていただきたいと思います。山藤さんよろしくをお願いします。

山藤：

まずは皆さんのプレゼンを聞かせていただいて、おそらくこの映像を見ている皆さんも思ったと思うんですけど、どのチームもほんと素晴らしい、素敵だし心がほんとに動きました。一方で見ている高校生からすごい皆さん遠い存在に感じるような瞬間もね、凄すぎて思うかもしれませんけど実はみんなと一緒に高校生なんだよ、っていうところを少し引き出せたらなあって思うんです。皆さん一人ひとりに答えていただきたいなと思うんですが、皆さん自己紹介するときに折り紙を思い出していただいて、皆さんが自己紹介するときに折り紙で例えると何色かなって考えていただいて、色とともに私はこういう人間ですとか高校生ですっていうのを一人ずつご紹介いただければなって思います

例えば僕は水色を選ぼうと思います。それは地球をイメージする水色で家族や学校の仲間やあとは子供たち生徒たちと山に行ったり川に行ったり海に行ったり。そういう自然でいろいろ活動することがとても好きなんです。なので僕らしさっていうことで水色を選ぼうかなと思うんですけど、そんな感じで皆さんカラフルな色紙を思い出していただいて、皆さんらしさっていうものを色とともにご紹介いただければと思います。

急で難しいかもしれませんがお願いします。氷川のぎろっちょのお2人からお願いしていいですか。

堀川（氷川のぎろっちょ）：

氷川のぎろっちょの堀川桃子です。私は水泳を9年間やっていてとても水泳が好きなので

水色です。純粋な心というのがあって純粋さは水色っていう感じで、楽しそうだなあとか面白そうだなあと思ったらすぐに行動してしまうので水色です。

山藤：

よくわかりました。ありがとうございます。続いてお願いしてもいいですか。

竹山（氷川のぎろっちょ）：

私は青色にしたいと思います。理由としては、私たちの会社は氷川のぎろっちょということで、清流氷川の周辺についていろいろ考える会社で、会社のロゴも清流をイメージした青色を基調に作っています。またちょっとは悪いところではあるんですけど、たまに流されやすいところがあるという意味も込めて、水を意味する青色にしました。

山藤：

ありがとうございます。

自分自身が企業の色とかぎろっちょが大事にしている色とも重なるところもあるんですね。すごく素敵だと思います。ありがとうございました。

では同じように色を使って皆さんのことを教えてください。では川内商工高校の皆さんお願いします。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

私は緑色だと思います。私の性格はあまりみんなの前に出る方ではないし、一人で何かをすることもできない方なので、緑色はどの色にも合うし背景とかにも使われて、だからこそ自分はみんなと一緒にやっていくのが好きなので緑色にしました。

山藤：

なるほど。今日は表に出てメディアに出て行くというのは、とても緊張していますか。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

はい。

山藤：

そうですね。ありがとうございます。続けてお願いします。

小村（鹿児島県立川内商工高等学校）：

私は青色が好きなので青色を選ぶと思います。理由としては個人的にも青色が好きというものもあるんですけど、私は甑島出身で青色というのが身近にありました。海とか空の色とかですごく自分の周りに青色があったっていうのもあるので、それで青色が好きです。あと悪い部分なんですけど少し人見知りで、心を許した人ではないとちょっと態度が冷たいと言われることがあるので、冷たいイメージの寒色の青色かなと思います。

山藤：

ほんとにパーソナルな部分を出して下さってありがとうございます。全然、表現してるところとかその笑顔とか冷たいって感じないですけど、そういう場面もあるってことなんですね。ありがとうございます。

では同じように色で表現していただいてもいいでしょうか。人吉高校の皆さんお願いします。

吉川（熊本県立人吉高等学校）：

自分の色は赤がちょっと入った明るめの青色じゃないかなと思います。

理由としては自分はだいたい静かに何か一人でやってたりすることが多くて、あまりみんなとつるんだり嫌いではないんですけど、楽しいんですけど、一人でいることが多いです。

自分で黙々とやっていたり部活とかでみんなと共にやるときはちょっとキャラを変えて明るさを出して活発なイメージが僕は赤にあるので、時と場合によっては赤みが出てくるような性格だと思ってるので赤みがある明るめの青だと思います。

山藤：

なるほど。では自分の家にいるときとか自分の好きなことやってる時とチームメンバーでやる時っていうのは少し色を変えながら活動されてるっていうことなんですね。よくわかりました。じゃあまた続いてお願いしてもいいですか。

藪田（熊本県立人吉高等学校）：

僕はちょっとカラフルではないんですけど白色かなと思っています。というのも、僕はいろいろなことに興味があって興味があることにはそのことを知りたいと思うし、いろいろなことをこれからも知っていききたい思っているので何色にでもなれる白色と思います。

ただ、ほんとはクールな青色になりたいです。

山藤：

それは何ですか。

蓑田（熊本県立人吉高等学校）：

動じない心が欲しいです。

山藤：

もしかしたら優しいのですね。いろいろな意見を取り入れて優しさみたいなものとか、今までの活動とかで迷っていたこととかいろいろな意見を決断しないといけない瞬間があったから今みたいな表現ができたのかなと思いつながりながら聞いていました。

皆さんありがとうございます。ほんとにパーソナルな部分も出してもらってこのSNS を見ている皆さんも自分にこんな近いところがあるのかなとか、とっても似たようなところがあるんだとか伝わったと思います。

それでは3つのテーマで今日はパネルディスカッションを皆さんとしていきたいと思うんですけども、ざっくり言うと過去、過去っていうのはこの皆さんが起こってるプロジェクトの本当一番初期の時代の話とそして現在、まさに今プロジェクト進行している今皆さんの状態、そして未来、このプロジェクトの後のさらにどんな未来を想像してらっしゃるのか。そんな3つのテーマに分けてそれぞれのチームにお話を伺いたいと思っています。

まずはですね、過去ということで「思いのめばえ」というタイトルで少し皆さんとお話しさせていただきたいと思うんですけども、まずはそのそれぞれ素晴らしいプロジェクトを実施されて5年4年そしてもう二代目になっているっていう、歳を超えて皆さんプロジェクトをされてるんですけども、一番初めのきっかけになる瞬間、このプロジェクトが生まれる本当の一番初めのきっかけになる瞬間という頃のお話を伺いたいです。なんでこのプロジェクトにつながっていくのかって何がきっかけになっていたのか、どんなことが始まりだったのか、氷川のぎろっちょの皆さんはもしかして小学校の時だったんじゃないのかなと思うんですけども、そのあたりを少し皆さん一人ずつ伺いしてもいいですか。氷川のぎろっちょの皆さんからお願いします。

堀川（氷川のぎろっちょ）：

私は小学3年生の頃から子供ども記者クラブというものに入っていて、親が販売センター

に勤めていたのもあって小学校2年生位の時から一緒について行って活動を見てきました。親も勤めていることもあって入らざるを得ない環境だったっていうのもあるんですけど、中学生や高校生のお兄さんお姉さんがとても楽しそうにしている、また子供記者クラブの活動は月に1回ってこともあって参加できる時に参加するというのがモットーだったので、抵抗なく楽しい、楽しそうだなっていう感情だけで参加していました。

山藤：

ありがとうございます。でははじめはご家族から勧められた記者クラブへの経験体験が、先輩たちの楽しい姿を見てのめり込んだという状況だったんですね。

堀川（氷川のぎろっちょ）：

はい、そうです。

山藤：

では見てる皆さん、親がちょっとやってみたらって言われたものにまずは飛び込んでみるって言うことも大事かもしれませんね。

では竹山さんお願いしてもいいですか。

竹山（氷川のぎろっちょ）：

私は小学校5年生の頃に子ども供記者クラブに入会したんですけど、そのきっかけは私すごい国語で文章、感想文とか作文を書くのがすごく苦手で、その子供記者クラブでは作文の書き方や記事の書き方を教えていただけると言うことで少しは得意になれるかなというのがきっかけで記者クラブに入りました。それで活動を続けていくうちに、まちの課題解決・探求コースというものができて、その1期生として中学1年生の頃にそのコースに入って活動をしたんですけど、そのコースに入るきっかけは親の「やってみたら」という一声で活動してきました。

山藤：

ここで二人から教わったのは親のちょっとしたひと言ってというのが結構大事になってくるかもしれませんね。しかも今の話でちょっと素敵だな、聞いている皆さんの勇気が湧くなと思ったのは、文章書くのが苦手だからこそちょっと頑張ってみようかなっていうその気持ちがあったっていう。そこから今に繋がっているということだったので、今話を聞いている皆

さん苦手なことにちょっと向かってみるって言う事が今につながるって先輩たちの話でしたね。ありがとうございます。同じようにこの活動初期の頃のお話を川内商工高校の皆さんちょっと思い出してお話いただけますか。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

私たちは課題研究でこの動画編集というので作品を作っているんですけど、動画編集に入るきっかけとなったのが先輩たちの発表が去年やおとしにあって、それを見て動画編集をやりたいなという興味と、あと、動画編集をする上で取材先に行かないといけないっていうのがあって、それは私が苦手としている分野だったのでそれを克服したいなと思って動画編集という課題研究に入って活動を行っています。

山藤：

ありがとうございます。その授業はみんな受けなきゃいけないんですか、それとも自分で選ぶんですか。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

自分たちで6つある項目の中から選んでやっています。

山藤：

なるほどじゃあまずは選ぶっていうのがあってでもぎろっちょの方とも一緒にちょっと苦手って言うところもあって取材もあるから怖いなあって思ったけど、そこを選んでみたっていうところが1つ今につながってるってことですね。ありがとうございます。

では小村さんお願いしてもいいですか。

小村（鹿児島県立川内商工高等学校）：

私も動画編集を自分で選択してこの学習を行っているのですが、きっかけとして私が日常的に動画というものを見る機会が多い環境であって、動画の中にもたくさんの編集技術が組み込まれていることからすごくそこから興味を持ってどんなことが使われているのかとか、どんな仕組みなのだろうとか、どれほど難しいのだろうとか、すごく興味があったので友達と一緒に選択して学習を行おうと思ったのがきっかけです。

山藤：

ありがとうございます。まず動画を作るって言うところにチャレンジしてみたいとか、面白そうだなとかやっぱり難しそうだなあと思ったけど知ってみたいなど、そういう気持ちが沸き上がったっていうのがきっかけだったんですね。

お二人に質問なんですけど、皆さんの世代っていうのはデジタルネイティブって言われているのですが、結構小さい時から身近なところにスマホや iPad がありましたか。小さい頃から触っていましたか。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

私は中学生の時は自分の携帯を持っていなかったんですけど、親が持っていたのでそれを使って動画などを見ていました。

山藤：

なるほど。小村さんはいかがですか。

小村（鹿児島県立川内商工高等学校）：

はい、私も同じく中学の頃はスマホを持ってなくて、高校入学したのと同時にスマホを購入したんですが、中学の頃は家に iPad があったのでタブレットでネットで検索したり動画を見たりなどしていました。

山藤：

ありがとうございます。僕は実は小学生の2人の子供を持つ親でもあるんですけど、iPhoneとかiPadを持つことを「子供たちに持たせるのダメ」とパパ友達からも聞くんですけどね。適切に使ってるっていうのは皆さんのようなちょっと頑張ってみようっていう生徒につながるのかもしれないなあと思って、完全禁止って言うよりはちょっと使えるって位がいいのかななんて教えてもらえました。ありがとうございました。

では人吉高校の皆さん初めの活動初期の思いとか、その当時の自分のことを少しお話しただけですでしょうか。

吉川（熊本県立人吉高等学校）：

自分は小学校中学校と結構そんな大きな波とかもなく単調に過ごしていて、それで充分楽しいなって思ってたんですけど、高校に入る頃になってもうちちょっと新しいことっていうか何か違うものに触れて、自分の中身をイメチェンしたいなあっていう思いもありまして。そ

んな時に小・中学校とバレー部だったんですけど高校はバレー部がなかったのでなんとなく友達に誘われた弓道部に入ってそこで弓道部がとっても楽しくて「新しいことをするって楽しいんだな」っていうのを思いました。そして1年生の3学期ごろに学校で開かれる発表会で「ボラ観」という存在を知りました。もともと僕は地元について、田舎ではあるんですけど全然嫌いとかなくて逆に好きで地域活性化が必要だなあって自分でも思っていて、何かちょっと貢献できたらなあという軽いノリで「ボラ観」のプロジェクトに参加しました。

山藤：

なるほど。私、高校の教員をやってるんですよね。今の話はすごく勇気をもらって他の生徒たちにも勇気になるのかなと思ったんですけど。小学校中学校まで大切にしていたクラブが高校でもやりたいなあと思ったらなかったから、例えばそういうクラブがない学校が悪いとかそういうクラブがないからもう残念だと思うのではなくて、新しいことをやってみようと思ってそこでポジティブに気持ちを切り替えて、チャレンジしたからこそ見えた世界というのを今教えていただいたような気がして、今同じような思いでいる高校生もたくさんいるのかなって思っ。そんなときに新しいことにチャレンジしてみるっていう気持ちが新しいものを発見できる、ってことを教えてくださったかなと思います。ありがとうございます。

では人吉高校の蓑田さんお願いしてもいいですか。

蓑田（熊本県立人吉高等学校）：

僕は高校1年生の時の1年間を毎日何となく生きててすごく「これやりたい」とかもあまりなくて、毎日を淡々と過ごせばいいかなと思っていたんですけど。高校2年生に上がるときに1年間を振り返ってみて「このまま同じような1年間を過ごしていいのか」って考えたときに、何かしなきゃいけないなあっていうその意識の変化があって、2年生ではいろんなボランティアに参加しまくろうと思ってました。そんな時に1年生の3学期で先輩方が始めたこの「ボラ観」という発表をみて、純粹にかっこいいなと思いました。そして僕もこのようなかっこいい先輩になりたいと思い、最初は地域活性化なんて目的にせず、僕はただ純粹に「楽しそう、かっこいい」という理由で活動に入りました。

山藤：

ありがとうございます。すごくたくさんのことを教えてもらったなあと思います。

1つはちょうど年の節目、他の皆さんにもありましたね、小学校から中学校に入った瞬間とか中学校から高校に来たときにちょっとチャレンジするっていう瞬間。今の話は1年生か

ら2年生、2年生から3年生ってその変わり目の時にちょっとチャレンジしてみようっていう気持ちがスタートに生まれている。あとすごく大事な事は、はじめは地方創生とかそういうことをやろうじゃなくて「楽しそうだなあ」とか「カッコいいな」「ああいう先輩になりたいな」とかそういう衝動から始まってるとのことですかね。ここら辺は皆さんを支えている僕たち大人側が気をつけないといけないことだと思うので、すごくいいヒントを教えてくださいました。ありがとうございますそれでは次にですね。

少し今皆さんは今過去1番初めの思いの芽生えのあたりを聞かせていただいていた皆さんのヒントを教えてくださいました。次は活動が始まって行って現在に至るところというところで思いを形にしていく。過去から現在この辺のお話を伺いたいと思うんですが。皆さんその活動がより活発化していく皆さんの活動はどれも凄くて初めて聞くととっても遠い存在ってような感じがするんですが、一番はじめ、動き出していくときにそれぞれ何がやっぱり活動がより大きくなっていく、より力強くなっていくきっかけになってきたかなと、それぞれ分析は違うと思うんですけども教えてくださいました。

ではちょっと順番変えて川内商工高校の皆さんからお願いしてもいいですか。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

はい、もう一度質問よろしいですか。

山藤：

活動が力強く進むときのきっかけはどんなことかなって。例えばこういう人、こういう大人が近くにいたからとか、こういう仲間が近くにいてくれたからとか、こういう先生の一言があったからですとか、こういう勉強が活動にエンジンをかけていったっていうような、何か活動が継続していて、力強く皆さんの発表につながるような素晴らしい成果になるまでのきっかけとなっていく。その活動が動いていく中でのポイントっていうんですかね。こういう人がいたとかこういう学びがあったこういう出会いがあったみたいことがあったら教えてくださいました。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

最初は動画編集に興味本位で選んだんですけど、動画編集の課題研究をやっていく中で動画編集の難しさを知って、最近になって専門の先生から動画編集のやり方を教えてもらったんですけど、その中で自分が伝えたいことを人に伝える大切さとかやり方を教えてもらって、そこから私も人に伝えられるような動画を作れたらいいなと思いました。

山藤：

その動画編集を教えてください先生が存在っていうのが大きかったんですかね。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

はい、そうですね。

山藤：

ありがとうございます。もしかしたら同じになるかもしれませんが違う視点かもしれません川内商工高校の小村さんはいかがですか。

小村（鹿児島県立川内商工高等学校）：

私も同じく興味本位でこの動画編集という科目を選択したのですが、最初は本当にやってみたいという思いで始めたんですが、段々やっていくうちに難しさや楽しさを知ることができて、ますます勉強したいと思っていた矢先に、講師の先生からいろんなことを教えていただいて、感情に訴え、思いを伝える大切さやその動画と言う短い時間の中でどういかに伝えていくかというその大切さを知って、ますます勉強したいなあ、もっと深めたいなと思いました。

山藤：

ありがとうございます。お二人からすごく良いヒントをいただきました。はじめは興味本位で始めてやっぱり難しい課題にぶち当たると。その時に適切なフォローと適切なアドバイスをしてくださっている講師の先生、大人の存在があったということでピンチを乗り越えていっているんだなと思いました。きっと乗り越えたところに見えなかった楽しさとか、もっと伝えたいというお二人の熱い思いが膨れ上がっていったと思いました。

同じようにいろいろな角度からあると思うんですけど、活動がどのように前進していくのかという辺りを人吉高校のお二人に教えていただきたいなと思います。いかがでしょうか。

吉川（熊本県立人吉高等学校）：

自分は、最初は先輩方がいて先輩方との話し合いとかに参加してこういう企画をやるよって言うので、その話を聞いてその企画運営に参加していて、最初に関わった時に3年生は受験期で自分たちがいきなり主体となって動かないといけない時に最初の方は先輩に頼りきっ

てしまって、先輩がその相手の方に連絡をつけて電話会議で報告して、それをまとめてじゃあどうするみたいな感じでどんどん改善していくようにして企画を作っていたんですけど、先輩が相手方に行けないということになり、僕がちょうど寄れる所にいたので部活の帰りにその相手方に行ったんですけど、準備とかもしてなくて結果的に得たかった情報の10分の1も得られなかったというか、あまり成果がなくて、それで電話に参加したときに、自分は適当にやってたんだなあっていうのを伝えて、1人でやったんで1人ではちょっと厳しいなあと思って、まず僕はその思いの丈を先輩とか他の間メンバーに伝えて、ちゃんとしなないといけないなあと心を入れ替えて、その時から企画について自分から積極的に参加するようになって、ちゃんと全体像も把握できるようにできるだけ会議に参加して、もちろん相手方にも支えられているので、相手方の都合を割いていただいているので、そんな貴重な機会を無駄にはもうできないので、より企画を熟知してこの活動を続けるようになりました。

山藤：

今の思いが生まれていくきっかけは先輩が行けなくなって自分で行けなきゃ、自分が行きますっていうところで完全に責任が自分にかかってきたっていうところからだったんですけど、今のようなお話いただいたような感じになるまでには友達と話しながら感情が生まれてきましたか？それともそういうのを適切にアドバイスしてくれる先生や先輩がいましたか。それともほんとに自分で何か考えてるうちにそういう思いに至ったんですか。

吉川（熊本県立人吉高等学校）：

勝手な主観なんですけど、その電話を通して先輩方が特に中心となって話してて、他の2年生のメンバーともやってたんですけどなんかあんまり積極的にやってないように聞こえてて、自分が自分はその人吉球磨が好きだったので、ちょっと頑張りたいと思ってるのになあみたいな、ちょっと勝手な思い込みから責任を感じて、自分から連絡を取りに行くようになりました。

山藤：

自分から動き始めて、今のような考えになったということですね。

ありがとうございます。では蓑田さんにもお願いしてもいいですか。

蓑田（熊本県立人吉高等学校）：

私たちが活動を進めていく上で一番そういう転機になったのは、やはり基本理念設立の時

かなと思っています。というのも、まずこのプロジェクト自体が先輩たちが生み出したものであって、先輩たちは「人吉・球磨以外の外部の方々に等しくを知ってもらいたい」という考えがあって、僕たちは「活動を通してその地域の地域内の内側の若者に知ってもらって内側から盛り上げていくべきだ」という思いがあって、それぞれの思いが強すぎるあまりに、それぞれで目指す場所がズレてきて活動に支障が出るがあったんですね。そこでこのままじゃダメだと言うことでみんな話合っ、基本理念である先程紹介した「人吉・球磨を地図から消したくない」というものを作って、最終的な目標は「人吉・球磨を地図から消さない」、「全体的な活性化」ということにまとめて、そこで初めて意志がぴったりあったのかなと思います。

山藤：

ありがとうございます。すごく深い話ですね。いろんなプロジェクト活動するにもその最上位目標、その活動の理念目的をしっかりと把握してからそれぞれ活動を考える。この活動は先輩達からいろいろ手法として降ってくると思うんですけど、その手法をやっている時だけではダメで、ポイントはその活動の最上位目標をしっかりと確認して、自分が責任をもって進めていく。そういう風にフェーズが変わったときに今皆さんが紹介してくださったような力強い活動になったということを教わりました。

同じように氷川のぎろっちょの皆さんいかがでしょうか。

竹山さんに今同じ質問したいと思うんですけどもこの活動が継続していく中で一番ポイントになってきたこととか、どんなことがお力強い活動に変わっていったのかっていうところを教えていただいてもいいでしょうか。

竹山（氷川のぎろっちょ）：

私たちが会社を作ろうって決めた時に、会社にした理由を堀川がスライドの中で発表したんですけど、私たちはこれだけ本気で取り組みますよって言うことを表したいとか、いろんな協力とか応援をしてもらうにはやっぱりきちんとした組織であった方がいいんじゃないかということでその株式会社を設立したんですね。会社を作りますって言った時に「会社は多分難しい、無理だと思うよ」って言われたんですね。「かなり難しいからやめた方がいい」と言われたんですけど、その時はテンションがすごく高くて「難しいなら逆にやってやるよ！」って感じで逆に燃えてしまって。その時に周りのみんなも同じように「頑張ろう！」という意見を言ってくれたので、やっぱりそういう仲間の存在もあると思います。

山藤：

ありがとうございます。まずは起業するってすごいことだと思うんですけど、学生のうちに起業しちゃおうという意見があって、多くの人が無理だよという中で、やろうよという仲間の声があったと、そういうことですね。なるほどですね。

氷川のぎろっちょの堀川さんに伺いたいんですけども、氷川のぎろっちょは活動的にはもう5年続いているんですよね？継続していく中でやっぱりここがポイントだなと、活動が5年も続いているっていう中でこういうところポイントだったとか、難しかったけどこういう風にやったから継続できてるって、その活動を長くやっていくためのポイントと感じていることを教えていただけないでしょうか。

堀川（氷川のぎろっちょ）：

2年ほど前の話になるんですけど、会社の設立1周年イベントとして「ぎろっちょ変顔コンテスト」を行ったんですけど、そのイベントが私たちにとって全て何もかも初めて自分たちだけで企画するというイベントで、企画合宿にも参加して企画の仕方も学んだんですけど、当日の自分たちの動きだったりとか、当日になって「これが足りない」とか準備不足だったりとか、そういうところがあって失敗を経験しました。プレゼンとか講義とかは最初からすらすらとアドリブとか踏まえてしゃべれたわけじゃなくて、いろんな場面があって回数をこなしてきて、次こうしたらいいとか今回は成功したとか、日々邁進して得られるものや学ぶことがあったので、日々進化しているなと思います。また、他の学校や他の学年の人たちと一緒に活動するので刺激的で、普通の学校では教えてもらえないこととかも教えてもらえるし、やっぱりみんな仲間がいて楽しいっていう気持ちがあるので5年も続いているんだなと思います。

山藤：

続いているところには「楽しさ」があるっていうことですね。

たくさんの失敗があるけどその失敗も乗り越えていくっていうところの経験が上がっていくっていうのもなんか実感できてるのも「楽しい」っていうのにつながったり、その失敗をたくさんしてるっていうことを認識して成長していくっていう過程を感じているっていうのがやっぱり続いている原因なのかもしれませんね。

ありがとうございます。あつという間に時間が過ぎてしまっていますが、今度はタイトルを「未来」に向けてちょっとお話をしていきたいなと思うんですが、皆さんのプロジェクトこれが未来につながって行って未来を作っていくと思う、この「思いのゆくえ」という形で

皆さんに伺いたいと思います。

まずは人吉高校の吉川さんに伺いたいんですけども。このプロジェクトを今後どんな風に大きくつなげていきたいか、どんなプロジェクトに発展していったらほしいか教えていただけますか。

吉川（熊本県立人吉高等学校）：

地域活性化の活動は継続していくことが大事だと考えております。

現在人吉・球磨は、豪雨の災害でとても被害が大きくて大変な状況になっているんですけど、ボラ観で学んだ若者の力っていうのと、人とのつながりっていうのは復興をしていく上でとても必要なもののうちの1つだと考えているので、豪雨の災害で被害を受けてしまったけれどもそこからもっと発展できるように「ボラ観」の活動を通して地域活性化につながっていけばいいなあって思うのと、自分は引退なので、後輩の人たちがどういう風に次の世代につなげていくかの気になっているので、後輩の頑張りも今とても期待してます。

山藤：

ありがとうございます。ではこの活動は継続して欲しいということが未来につなげたいことですね。蓑田さんはいかがですか。

蓑田（熊本県立人吉高等学校）：

やっぱりこの地域活性化というものを目的にして活動していく上で、続けていく事はもちろん大切なんですけど、こういった地域の課題に向かっていろいろ活動していく高校生がもっと増えたらとんでもないことになるんじゃないかと僕は思っていて、こういった活動をもっと興味を持ってしていったらほしいと思っているので、さらに発展して他の高校生にいい刺激が与えられるように続けていったらほしいと思っています。あと、今年はコロナと人吉・球磨の水害でなかなか活動ができない日が続いて、おそらく地球温暖化だったり異常気象がこれからも悪化していける時に、もっと予測できないことが起こるんじゃないかなと僕は考えてます。そういった時にそういった予測できないことにも負けない、耐えられるような地域づくりが必要なんじゃないかなと僕は考えてます。

山藤：

ありがとうございます。すごい力強い。予測不可能時代でも、力強く生きていくためのこのプロジェクトがそんな人材を育むためのプロジェクトに広がるようにと思いを強く感じま

した。ありがとうございます。

川内商工高校の加治屋さんこのプロジェクトを未来的にはどのようにつながってほしい、広がってほしいと思いますか。

加治屋（鹿児島県立川内商工高等学校）：

今はまだ私たちの活動は最初の段階で、今までは先輩たちがやってきた活動を見て動画編集をやっていたんですけど、新型コロナウイルスの影響もあって観光を題材にしてその動画を作れないんですけど、これからは健康を題材として薩摩川内市の魅力を伝えていけたらなと思っています。

山藤：

なるほど。新しいテーマで動画を作って広げていきたいってことですね。

小村さんいかがですか。

小村（鹿児島県立川内商工高等学校）：

私の活動もまだ前段階で、以前先輩方がやった活動していた「観光」のテーマで活動するのは今年は少し難しいとの事だったので「健康」をテーマに自分の故郷である甕島を取材しようと思っているのですが、動画を制作していく中で自分の大好きな故郷である甕島の魅力や良さを観光以外の面でも伝えていき、そして甕島だけでなく薩摩川内市の良さも全国・全世界に発信して行けたらいいなと思っています。

山藤：

すごい素敵ですね。日本だけでなく世界にもその地域の素敵なところを発信する。地域の人もきっと喜ぶと思いますね。ありがとうございます。

氷川のぎろっちょの竹山さん、皆さんのプロジェクト未来へどんな風に広がってほしいか、つなげていきたいかを教えてもらえますか。

竹山（氷川のぎろっちょ）：

私はこの活動を続けていて、いろんなことを体験させてもらっていてほんとに自分の為にもなるし単純にすごく楽しいですし、こういう活動を後輩にどんどん引き継いでいきたいなあとと思っています。私は正直この株式会社っていう形をそのまま引き継いで欲しいっていうわけではなくて会社じゃなくて別の形でこういう「活動」を引き継いで欲しいなと思

っていて、それがどんどん引き継がれて引き継がれて、日本全国じゃないですけど、いろんなところに広まって行ってほしいなと思っています。

山藤：

ありがとうございます。では起業したその会社を継続じゃなくてそれも手段でやっぱり皆さんがお話ししてくださっている地域をより元気にしていきたいという最上位目標に向かっているような形でこの活動継続してほしいという思いですね。

堀川さんいかがですか。

堀川（氷川のぎろっちょ）：

私は人とのつながりを大事にこれからも活動を進めていきたいなと思っています。私たちがやろうとしている事は農業分野だったり人材育成分野だったり、あとはものづくりとか商品開発いろんな分野があります。県外研修とかに行くといろんな大学の先生とかいろんな知識を持ったいろんな分野の広い範囲の人たちと関わることがあって、そこで人とのつながりができると思います。その人とのつながりをこれからも大切にして、自分たちの事業に巻き込んで。私たちの足りない力は大人の人たちに協力してもらって、一緒に活動していきたいと思っているので、ネットワークを広げて活動していきたいと思っています。

山藤：

もっともっとネットワークを広げてつなげていきたいってことですね。

あの3チームの皆さんからほんと共通するのは自分たちで責任を持って行動している時間はもちろんありながら、うまく近くにいる大人の皆さんに「助けて」が言える。ちょっとサポートしてねっていうのがすごく言えているんだろうな。そんな大人の皆さんが皆さんを支えていて、でも皆さんその大人の皆さんから言われていることをただただやってるんじゃなくて、自分の思いを大切にして続けていく。行動したら次のまたつながりが生まれたり次の課題が見えたり次のアクションが生まれていく。そういうものが継続されて成長していくっていう感覚や自分が変わっていくって言う感覚を「楽しい」って思っているんだなって思いました。その先に地方創生とか地方を元気にしていこうという日本の抱える社会課題があるんだけど、でも根っこには「楽しい」っていう思いがあるんだなっていうことがわかりました。

たくさんの方を教えてくださいありがとうございます。皆さんの素晴らしいプレゼン、素晴らしいパネルディスカッションでの生の声を教えてくださいました。「ちょっと

変えてみる」。今日から明日からちょっと今までの活動と少し変えてみる。勇気を持って苦手なことかもしれないけれど少し変えてみる。同じじゃなくてちょっと変えてみる。そういうことが今、発表してくれた皆さんのような、いずれは素敵なプロジェクトにつながっていくんじゃないかなあっていうことをすごく感じる時間でした。今この放送を見てくださっている皆さんも、ほんのちょっと何か変えてみる、もしかしたら今日の帰り道をちょっと変えてみるとか、いつも話さなかった人にちょっと話しかけてみるとか、読まなかったなという本をちょっと1ページだけでも読んでみるとか、ご飯を右手で食べるのを左で食べてみるとか、そんな感じでもいいかもしれません。ちょっと苦手だなあって思うことかもしれないけれどちょっと変えてやってみる。その継続と失敗してもその変化を続けてみるのが、今発表していただいたすごいプロジェクトを発表してくれた皆さんにつながるのかなって。それが全国で高校生がもしくは中学生小学生もちょっと変えて動いてみる地域で動いてみるっていうことが、もしかしたらこの地方創生の大きなエネルギーになる。そんなヒントを皆さんからいただいたのかなと思います。プロジェクトを起こしてたくさんの困難があって、乗り越えて今このプレゼンできる状態まで来た皆さんだからこそですね、本当に染み入る全国の高校生に伝わるメッセージがたくさんあったかなと思います。3チームの皆さんありがとうございましたそしてこれからも日本を引っ張るチームとして発信、活動を継続して、そしてまたその活動は発信して全国の中高生に刺激を与えてほしいと思います。

今日は皆さん本当にありがとうございました。これでパネルディスカッションを終わりたいと思います。ありがとうございました。

司会：

山藤さん本当にありがとうございました。

本当に物事が始まるきっかけであったり、心が動き出す瞬間っていうのはどこにあるのかわからないという風に感じました。だからこそ何か行動を起こしてみることが大切なんだなという風に思います。ご覧になられた方もたくさんの刺激を受けられたのではないかと思います。

さて本日は長時間にわたりご視聴いただきましてまことにありがとうございました。

山藤さんそしてパネリストの皆さんにも改めて御礼申し上げますありがとうございました。皆さん今日力強い発信をしていただきましたけども最初からこうではなく今までの様々な活動を通して成長されたことでここまでこられたという風に話をされていました。

皆さんが誰かから何かから刺激を受けたようにきょうこの場がですね、ご覧になられた方の何かの刺激となって地方創生が進んでいけばと思います。

以上でワカモノによる地方創生ライブシンポジウムを終了いたします。本日は誠にありがとうございました。

以上